



## 若者は地域の爆発力

### 畑井 克彦

伊丹市立伊丹高等学校 情報科主任

関西学院大学 非常勤講師

#### 地域活性化とは

「地域活性化を継続的に長いスパンで考える」とした時の、活性化とはどういうものなのでしょうか。イベントをした時の参加人数ですか、お店の売上ですか、住民の数ですか。

私は、住民が「共に育ちを感じられる状態」だと捉えています。別な言い方をすると、暮らしていて楽しいということではないでしょうか。

#### 大人のおせっかいが子どもを委縮させる

長期の地域活性化を考えた時、「そのためには教育ですよね。」となって大人が子どものために、いろいろと用意周到にしてあげるといふことが多いようです。若者や子どもたちは「お客さん」として登場します。子どもが多く集まっていると活気がでますから、多くの地域で普通に行われていることだと思えます。しかし、このように大人が子どものために用意周到に準備することが、子どもたちに何をもたらしめているのかを、まず考えてみましょう。

最近の若者の特徴として、考えない、指示待ちである、自分からやろうとしない、考えを言えない、孤立しているなどが大人の議論としてよく語られます。しかし、今あげた子どもの状態の特徴は、大人が子どもたちの為と思って「手をかけすぎた」ことに多くの原因があるのではないのでしょうか。大人が主人公である限り、子どもは大人の評価を気にします。地域の活動において、子どもたちはお客さん扱いで大人からやらしてもらっている範囲では、体験は薄いものにならざるを得なく、育ちを望むことは難しいのではないのでしょうか。

では、どうすれば地域を支えてくれる自立した若者が育つのでしょうか。まず、高校生が地域連携することで自立し活躍する事例を紹介します。そこから地域を元気にするヒントをまとめたいと思います。

## 地域の課題に取り組む（震災の教訓から、人のつながりの日常化を図る）

18年前、阪神大震災の教訓から人のつながりの大切さが注目を集めました。東日本大震災でも再認識され、災害以前に「人との関係性を深める（絆）」ことが日常化していないと、人は孤立化してしまうことが明確になりました。人との関係性をいかに日常的に深めるかという課題に対して、商店街で取り組んでいる事例をご紹介します。それは、伊丹市立伊丹高等学校が年間を通じて取り組んでいる「伊丹育ち合い（共育）プロジェクト」のメイン事業であるハロウィンイベントです。伊丹市の商店街で9回開催しており、平成25年は2つの商店街とイオンモールが会場となりました。

地域には見えない問題があるものです。イオンモールの出店時に、地元の商店街は反対運動をしており、イオンモールと商店街の間には見えない大きな壁が立ちふさがっていました。

しかし、高校生にとってはそんなことは関係ありません。参加する子どもたちが喜ぶことを一番に考えるのです。対立する大人たちでは考え付かない2つ



の商店街とイオンモールの間を、ハロウィンの仮装をした小さな子どもたちが闊歩し回遊性を高めることを思いついたのです。高校生と大学生が知恵をだしあって、商店街とイオンモールから景品を提供してもらい、それぞれの会場に参加していた子どもたちの2割程度が、仮装したまま他の会場まで行って交流をしたのです。まったく雰囲気の違いの違った他の会場を見て、子どもたちは驚いていました。子どもたちが会場を回遊するということが成功させて、大人の利害関係という見えない壁を融かし、商店街の人とイオンモールの人をつなぐ次なる企画を生み出そうとしています。

子どもたちはいろいろな工夫をします。イオンモールでは仮装した子どもたちがダンスを踊るという企画を考え出しました。小さな白雪姫がダンスを披露するなんてステキだと思いませんか。



このように新しい発想で、高校生が大学生やイオンモールの企画担当者や商店街の人々と一緒に責任を持って企画実行することで、共に育ち合うことができたのです。

この活動を通じて高校生から出てきたのが「本気こそが本気をつなぐ」という言葉です。これを高校生は「本気一本気理論」と言っています。この意味は本気になったものが、相手の本気を覚醒し、この本気覚醒がどんどん伝播していくということです。また、本気の人をつながりやを体得しリーダー役を果たした者は、卒業しても地域活動に関わりをもつ職業に就職しても地域と関わっているのです。これは、自立・自発という言葉を具現化している事例ではないでしょうか。

これらの活動を通じてわかったことがあります。それは、これらの活動を補完してくれるのがICTツールで、これが無くては多くの人をつながりを生み出すことは難しいでしょう。つまり、地域SNSが高校生や大学生、商店街をつなぐ共通のプラットフォームとなっています。イベントごとにコミュニティがつけられ、意思のあるものが参加して自発的に企画立案していくことが定着しています。つまりバーチャルな仕組みが実際の活動を補完することで、取り組みのプロセスが可視化され参加のデザインが可能となるのです。もちろんLINEやfacebookなど活用場面に応じて最適なものを積極的に取り入れることも大切でしょう。

### **地域を元気にするヒントとして**

まとめてみましょう。高校生が企画者となり地域との関わりを継続することによって、「①大人のエゴの壁を融かし人のつながりが出来る。②本気が伝播することで、やりがいを実感できる。③地域愛を持つきっかけとなっている。」ということが見えてきました。

「学校だけで教育するのではない、教育こそが未来だ！」という言葉をよく聞きます。しかし、高校生が企画者となる力を持っているにもかかわらず、単なる参加者とみなされていることは、あまりに「もったいない」。大人が若者と一緒になって失敗を恐れずに、どんどんとチャレンジしていくことを通じてこそ、世代を超え地域を元気にすることではないでしょうか。

地域の人と、そこに根差している高校生などの若者が、共に育ち合うことで地域が元気になっていく。この力は汲めば汲むほど湧いてくる泉です。この若者の尽きない爆発力を生かすことで未来に続く活動となることを願っています。

日本の元気は、地域の元気からです。地域の元気には若者の力が欠かせません。若者たちの活動を通して、我々、大人が学ぶことも多くあります。日本の未来のためにも、若者を育てる活動を続けていきたいと思ひます。

次回のリレーコラムは、井上あい子さんです。井上さんからは、ICTも人の力が一番重要だ、というお話が聞けると思ひます。

それでは井上さん、よろしくお願ひいたします。